

アーノルド・A・ロゴー

『トマス・ホップズ』(三)

四、一六三〇—四〇年代

一六三〇年の遅くに第二回大陸旅行から帰国したホップズは、三〇年から四〇年にかけて、第二代フォークランド子爵ルーシャス・ケアリーの田舎の地所Great Tew and Burfordの名をとる「グレート・テュー・サークル」と知的交遊をはかる。ケアリーは、一六一〇年に生まれ、一六四三年、内乱のニューベリーの戦いで戦死するまで、もっぱら、オックスフォードから十二マイルほどのテューで暮らした。宗派は、反ローマ教会のポーランド教会、つまり、ソシヌス派であった。「サークル」の交遊を通して詩や哲学論文をものした。「サークル」のメンバーのうち、主だった者には、ギルバート・シエルドン、ジョージ・モレイ、ジョージ・アール、ウィリアム・チリングワース(1602—44)。オックスフォード大学卒。神学博士。英国国教徒)。ヘンリー・ハモンド、エドマンド・ウォーラー(1606—87。クロムウェルの従弟。オックスフォード大学卒。ホップズの『市民論』に感心し英訳を試みた詩人)、シドニー・ゴドルフィン(1610—43。『リヴァイアサン』が捧げられたフランシスの弟。内乱のチャグフォードの戦いで戦死。遺言によりホップズに二百ポンドを贈る。)エイブラハム・カウリー(1618—67。ケンブリッジ大学卒。詩や戯曲をものし、喜劇『恋の謎』をケネルム・デイグビー卿に捧げた。)エドワード・ハイド(クラレンドン伯爵。チャールズ二世治下の大法官。『リヴァイアサン』批判を書くが、

岡 部 悟 朗

ホップズを「公正で親身のある会話と社交性に富む」と評す。)、ジョン・セルデン(1584—1654。オックスフォード大学卒。法学者。法史家。弁護士。著書に「テーブル・トーク」がある。ホップズは「リヴァイアサン」特別装丁本を贈った。死期に近い頃、ホップズが見舞い、「男らしく筆をふるってきた君が、何と女子のように死ぬのか」と言ったという。セルデンは遺言でホップズに一〇ポンド贈った。)等がいた。セルデンとホップズには、宗教観や魔女観で類似した点がある。例えば、セルデンは「テーブル・トーク」で「我々は、神の審判とは何であるかは告げることができない」とか、「魔女を禁ずる法律は、何か魔女が存在するということを示さない。しかし、それは、人間の生命を奪うような手段を使うかのものたちの犯意を処罰する」と述べたし、ホップズは、神が何であるかは知りえないという立場と共に、「リヴァイアサン」で「魔女については、魔女たちにはほんとうの魔力があるとは私は考えない。しかし、悪事を働くことができるという誤った信念があり、できる時にはやってやろうという意図を持っていることについて、彼らを処罰することは正当であると私は考える。」と述べた。

ホップズが関わった別の有力な「サークル」が「ウエルベック・サークル」であった。それは、ニューキャッスル伯爵ウィリアム・キャヴェンディッシュ(一六六五年以降、ニューキャッスル公爵となる。第二代デボンシャー伯爵と同じく、ハードウィックのベスの孫)の所領ウエルベックにあった。サークルのメンバーには、ベン・ジョンソン(1573?—1637。イギリス最初の桂冠詩人。多くの喜劇、悲劇の戯曲もある。)、ウィリアム・ダヴェナント(1606—68。ベン・ジョンソンの跡を襲って桂冠詩人となる。一六五一年に出版された韻文によるロマンス「ゴンデイバート」はホップズに献じられた。ホップズは長大な分析論文と好意的な論評を与えた。)、ジョン・ドライデン(ダヴェナントの後の桂冠詩人。ホップズ崇拜者で、屢々ホップズの教説をその戯曲の中で利用した。)等がいた。また、ウィリアム・キャヴェンディッシュの兄。数学者のチャールズも加わっており、彼を通じて、ホップズは、数学者のジョン・ペルや光学研究者のウォルター・ウォーナーを知り、科学の特質の研究に携わることになる。

ホップズは、一六三四年から一六三六年乃至三七年にかけて第三回目の大陸旅行に出かける。そこで、多くのフランスの知人、とりわけ、メルセンヌ・サークルと交遊をはかるのだが、それへの接触にはキャヴェンディッシュ兄弟が大きな役割を果たした。

そのメルセンヌ・サークルに言及する前にホップズの『第一原理小論』に触れねばなるまい。

一六四六年のニューキャッスル伯爵宛のホップズ書簡に次のような言葉がある。「光は、脳において運動によってひきおこされた心の想像イマジネーションであり、運動は再び、我々が明るさと呼ぶような身体の諸部分の運動によってひきおこされるということをウエルバック ('Wellback' となつてゐるが正しくは 'Wellbeck' —— 岡部) で (御主人様に断言申し上げて以来) ほぼ (一六六〇年)」。テンニエスは、この書簡を基に、一八八九年に、『小論』は一六三〇年に書かれたと確信した。創作の期日は別にしても、『小論』は哲学原理に関する部分的考察として興味深い。『小論』は三部からなるが、命題形式で表された膨大な数の定義が根本的に一つのテーマの下に相互連関づけられており、恐らく運動幾何学試論と呼べるものである。『小論』は、「何ごとにも加えられず、何ごとにも取りあげられず、現にあつた状態にとどまる」という叙述から始まる。つまり、あることが加えられたり取り去られたりしない限り何もものも変化しないということである。続いて「運動」に言及し、運動には「動かす力があるもの」と定義される「動因」(agents)と「動かされる力があるもの」と定義される「作用対象」(patients)がある。「動因は、運動を除いて作用対象に何ものも、即ち、何らかの固有の形相フォームをつくり出さない。」これらの定義に二つの付加的な用語、即ち「実体」と「偶有性」を確認する。「実体」は「空気や金のようにそれ自体で存在できるような、別の存在においてではなく存在するもの」であり、「偶有性」は「色彩は存在できないが、少し色づけられたものにおいて存在しうるように、他の事物があつて初めてそれが存在しうるような、別の存在において存在するもの」である。この定義から一つの結論に至る。「すべての事物は実体か偶有性のいずれかである。つまり、自然において存在するすべての事物は、他の存在において存在するか、他の存在においてではなく存在するかのいずれかであ

るからである。」また、いかなる「動因」も「作用対象」も「実体」にはかならない。それは、他の事物を動かすか他の事物によって動かされるかは別にして、それぞれ、「他の存在において」ではなく「それ自体において存在する」からである。「小論」の第三部において、感覚や感覚作用、理解、欲求、脳における像（かれは「映像」と呼ぶ）等の現象は、「動物的な精神の運動」に源を発すると結論づける。「欲求の行動は、動物的な精神を動かす対象に向かうその精神の運動である。対象は、意欲の作用因、即ち、動因であり、……動物的な精神は作用対象であり、……従って欲求は動因の結果である。」この見解は、「リヴァイアサン」で更に複雑に理解されるにせよ、それから逸脱することはなかった。無論、運動の因果的な意義を強調した人々には、遠くにコペルニクスが近くにはガリレオがおり、一六三〇年頃には運動に関する法則、理論、概念が非常に広まっていた。ホッブズとの関係でいえば、とりわけ、ホッブズの友人ウィリアム・ハーヴィ（1578—1657。ケンブリッジとパドヴァ大学に学ぶ。大法官ベーコンの医師。ホッブズに一〇ポンド遺贈）が重要で、かれは、「心臓と血液の運動」（一六二八年）の中で、血液が運動していることを明らかにした。ホッブズの「物体論」はハーヴィの見解と極めて一致しているが、ホッブズ最後の論文「熱と冷たさの原因と結果について（Decameron Physiologicum）」（一六七八年）では人間や動物の熱の源を検討しており、こうしたことは、ハーヴィの国王の鹿の解剖に立ち会った経験も生きているであろう。

ここで、第三回目の大陸旅行に話を戻すが、デカルトの友人であったキャヴェンディッシュは、ホッブズをメルセンヌやガッサンデイ、また、フランスの数学者で光学実験家クロード・ミドルジュに引き合わせたのであろう。ミドルジュ（1585—1647）は、デカルトの友人で、文芸の庇護者、円錐曲線に関する注目に値する書物の著者であった。「科学に対するかれの貢献は、一六二七年以降、光学用レンズを種々の異なった形に切削して友人デカルトを助けたことである。」（F・ブランド）キャヴェンディッシュはミドルジュに大いに関心を抱き、チャールズ一世の宮廷に來させようとしたといわれている。

第三回目の大陸旅行中、ホッブズにとって大きな出来事は、このメルセンヌ・サークルとの接触と共に、ガリレオとの会見を挙げねばなるまい。キャヴェンディッシュ兄弟は、ガリレオの研究に対するホッブズの関心を助長していたし、ニューキャッスル伯爵は、一六三三年頃、一六三二年一月にフローレンスで出版されたガリレオの『天文対話』(Dialogo dei due massimi sistemi del mondo)の写本を手に入れるようホッブズに依頼していた。ホッブズはその書物を簡単に入手しようと考えていたが、一六三四年一月二六日付の伯爵宛書簡で「それをお金で購入することは不可能です。初めほんのわずかしか出版されなかったし、そういう本を購入する人々は二度と手放すような人々ではありません。それは、イタリアにおいて、その宗教と自然理性との対立に關しルターやカルヴァンの書物のすべてがこれまでに成してきたよりも人々の宗教を傷つけずにおかない書物として受け取られていると聞きおよんでいます。」と述べた。

また、キャヴェンディッシュ兄弟は、メルセンヌの助力を得て、一六三五年乃至三六年にガリレオとホッブズの会見の手はずを整えたのであろう。ホッブズは『自叙伝』の中で会見場所をピサと記述しているが、テンニエスの分析によれば、フローレンス近郊にあるガリレオのアルチェトリ別荘「Il Gioiello」であつたとされる。ガリレオは、一六三三年六月、コペルニクス理論の是認を取り消したが、それにもかかわらず「異端の強い疑いがある」とされ拘留が命令された。十二月頃、許されてアルチェトリに戻り、そこで晩年の八年間を過ごした。会見の内容について、ホッブズは何も書きとめていないが、運動の理論を論じたり、倫理学や道徳哲学の特質に関する見解を交換したのであろう。テンニエスは、一八〇〇年に書かれたA・G・ケストナーによる数学史の論文に以下の記述を発見した。「ピサ大学の元教師Joh. Albert de Soriaは、ガリレオは、倫理学 [Sittenlehre] の教義は幾何学の諸原理を応用することによって数学的確實性に到らせることができるという初めての考えを、Grand-ducal Pleasure Palace付近を散策中に口頭でホッブズに示した、と断言する。」

神聖裁判の愚劣さがホッブズの思考に反映したのか、一六三六年七月二九日、ホッブズは、宮廷における敵について不平をこぼしていたニューキャッスル伯爵に書簡を送った。「閣下が世間で受けるに足る好遇を見い出せないのが残念至極

であります。しかし、閣下、危険を冒して海に乗り出す者は、あらゆる天候に堪えようと決意しなければなりません。ところで、私の役割についていえば飲んで陸地を確保することでありませぬ。ですから、閣下は今やそうすることが可能でありませぬ。」

一六三六年秋、ホッブズは一端、帰国の途につくが、当時、ペストが流行し、ホッブズ自身も肺炎乃至重症の流感にかかったため、ウェイ川河畔のバイフリートで足止めをくらった。ペストは、一六〇三年以来四度目の出現であったが、三年の流行はロンドンだけで一万四百名、翌年三〇八二名の生命を奪った。ニューキャッスルでは、全市の人口二万人のうち三五九七名の住民が亡くなった。十月十六日付伯爵宛の書簡でホッブズは「私が生涯奉公人としてあなた様方におつかえしますことを御約束することができません」と述べ、ウェルベックで研究を専念することとデボンシャー家のかれの職を放棄することを明らかにした。十月二六日付、十二月二五日付の書簡でもバイフリートに滞在していることを示すが、しかし、チャットワース会計帳簿によると、ホッブズに対して三七年、三八年に年五〇ポンド、三九年に六五ポンドの給与支払を記しており、結局のところ、ホッブズはデボンシャー家にとどまったらしい。とはいえ、ニューキャッスル伯爵とホッブズの親交は、依然、緊密であった。伯爵は有名な馬術家で、二冊の権威のある馬術書の著者であった。かれはホッブズに「馬の直線、旋回運動の易しさと難しさに関する考察」を求めたりした。それは、ホッブズの論文の題名にもなった。一六三九年初め、伯爵は、自ら調達した小軍隊を指揮して、数千人のスコットランド兵、即ち、国王の新祈祷書の是認を拒んだ所謂カヴィンターズの鎮圧に赴いたが、実際上の戦闘はなく、問題は、味方の貴族間の確執の方であった。七月頃、ロンドンに戻り、一六四〇年の短期・長期議会双方の議員をつとめたが、ストラフォード伯爵トマス・ウェントワースをロンドン塔から解放する陰謀にまきこまれた。その結果、四一年五月貴族院によって告発され、また、皇太子付き執事長の役職を解かれた。内乱が勃発すると、北部司令官におさまり再び進軍したが敗北し、ハンブルク、パリ、最後にアントワープに亡命した。アントワープでは画家ルーベンス所有の家を使用した。かれは、一六六〇年までイングラ

ドに戻らなかった。ホップズとは四五年頃大陸で会ったらしい。ホップズの『法の原理』(一六四〇年)は伯爵に捧げられたが、伯爵夫人マーガレットは、かの女の夫の伝記 *Life of the Duke of Newcastle* の中で、夫が「力は、大抵、智恵以上の働きをする。力のある愚者は賢くみえる。しかし、賢者も力がなければ愚かにみえる。だから、世界が智恵よりも力を選ぶのは理にかなっている。つまり、愚劣よりも力を求めること」、更に「他人が愚かであったり不幸の時を除いては、いかなる人も滅多に笑わない。そのことで、かれらの善良な性格を判断してよい」と述べたと記している。これらは、ホップズの著作にみえる表現と著しく類似している。例えば、『法の原理』の一節で、笑いの一因として「人が比較によって自らの能力が区別され明らかにされれば、他人の欠陥を笑う。……笑いは自らの勝算や優越についての突然の想像から生ずる」とホップズは述べている。

デボンシャー家にとどまったホップズは、第三代デボンシャー伯爵とその母との間の家督をめぐる対立にまきこまれたりしていたが、そのゴタゴタよりもイングランド全体の危機がホップズを囲繞することになる。

スコットランドにおける再度の戦闘の勃発(所謂第二次ビショップズ・ウォー)やスコットランド人のイングランド侵攻、大主教ロードとピューリタンとの敵意のいやます対立、ジョン・ハンプデンの造艦税支払い拒否、国王の筆頭諮問官ストラフォードに対する反逆罪告発で最高頂に達したジョン・ピムによる扇動的な庶民院演説等の一連の事件である。

ホップズは当時『法の原理』の原稿を脱稿しており「多くの紳士が写本(今日、六篇の原稿写本が確認されている)をもっており、著者についてかなりの噂になって」いた。ホップズは、一六四〇年十一月に長期議会が召集された時、「国王擁護のために危険を冒して執筆した最初の者」と主張していた。ストラフォードは、直後、死刑にされた。ロジャー・マナリング主教も「長期議会によって囚われ迫害された。」オーブリーは、「(セント・デヴィッドの)マナリング(主教)が彼(ホップズ)の学説(絶対主権に関する)、『法の原理』のこと」を説いたその廉で、他の人ともども彼は囚われてロンドン塔へ送られた。そこで、ホップズ氏は、保身のために転進する潮時と考え、去ってフランスに行き、(パリに居を

かまえた。」と伝えている。

亡命の真の理由がどうであれ、ホッブズがパリに向けて出発したのは、長期議会が開会された一六四〇年十一月の一、二週間後と考えられる。十一月か十二月にフランスに到着した際、ホッブズは『法の原理』の原稿写本を携えていた（公刊は一六五〇年）。（チャットワースにあるホッブズの原稿には、三つの写本がある。A.2A.と登録されている第一の写本は「HOBBS LEVIATHAN-ORIGINAL MS」と誤って題され「献辞」を欠くが写本は「ホッブズの自筆のように思える。」第二写本（A.2B）には「ホッブズ自筆」の献辞や自筆で何箇所かの脚注がある。第三写本（A.2C）は「誰か判らぬ筆記者の手になるもの」で不完全で「献辞」の最終頁が欠落している。）

従って、政治に関する最初の出版作品は、一六四二年の『Elementorum Philosophiae Sectio Tertia: De Cive』である。それは、そもそも、物体、人間、市民に充てた三部からなる論文の第三部となるものであった。しかし、イングランドは「荒れ狂い、支配の権利、臣民の服従という問題が沸騰し」ていたから、最初に『De Cive』を執筆し出版することにした。それは、メルセンヌ、ガッサンデイ、グロティウス（1583—1645）、そしてデカルト等によって高く評価された。そうした賞賛者の一人が、フランス人物理学者、翻訳家、旅行家、ルイ一四世の宮廷史料編纂官サミュエル・ソルビエール（1610?—1670）であった。南部フランス、ユージス近郊のプロテスタント家族に生まれたソルビエールは、青年期に、戦闘的カソリシズムを支持し、医者の家業とプロテスタントイイズムを捨てた。かれは、教皇アレキサンドル七世やクレメンティウス四世、また、マザランにとりいり、プロテスタントイイズム批判の書や翻訳を手がけた。カムデンの著作やモアの『ユートピア』をフランス語に翻訳した。一六四五年頃、メルセンヌかガッサンデイに紹介されてホッブズに出会った。かれは、『De Cive』をフランス語に翻訳した最初の人物であることに加え、『法の原理』のフランスにおける一六五二年の出版の責任を負った。また、一時期、『リヴァイアサン』の翻訳も考慮したが、不明の理由から、結局、翻訳しなかった。一六五一年、ホッブズが、イングランドに帰国した後、数年間はホッブズとソルビエールは仲のよい状態にあり、一

六六一年、ホップズは、ボイルと王立学士院批判の書である「*Dialogus Physicus*」をソルビエールに献呈した。ホップズに対するソルビエールの最大の貢献は、一種のリテラリー・エイジェントとしてであった。かれは、アムステルダムで、「*De Cive*」の二つの別個のラテン語版の一六四七年出版と、それに続いて一六四九年二つのフランス語版出版を取り決めた。四七年版と四九年版をアムステルダムで出版したのはパリでの出版に関し王室の許可を得ることができなかったためである。「*De Cive*」は、一六五四年六月一六日のローマのヴァチカンの布告にもかかわらず、フランス語訳で、一六五一年と六〇年にパリで出版された。同書は「禁書目録」に掲載された。ラテン語の「*De Cive*」は、更に、五七、六九、九六年にアムステルダムで出版された。

一六四七年のアムステルダム版のいくつかには、「皇太子の侍講」という見出しの下にホップズの装飾画像が描かれたり、公開が意図されていなかったメルセンヌやガツサンディの賞賛書簡が印刷されていた。一六四七年三月二二日、ソルビエール宛書簡でホップズは次の様に抗議し、以後、肖像画や題辞が削除された。「以下のことをいわなければなりません。つまり、「肖像画」が添付されないか、あるいは少なくとも、「*Principal Tutor to His Most Serene Highness the Prince of Wales*」の題辞が取り除かれるか削除されるかひきはがされるならば、私は進んでそれに高額の金を支払うでしょう。」皇太子チャールズの敵が「王室の家系を大衆に人気がないようにさせる口実として」ホップズ自身やその教義とつながりがあるという主張を利用するだろうし、「今後、どんな悪いことが起ころうとも——私の最も不名誉とすることだが——私の愚かさや虚しい野望のせいにするだろう。」更に、かれは、「帰国の願望が私を離さないとしても、この肩書によって祖国への帰国は妨げられてしまう。万一、イングランドが平穏であろうと、ともかく許可されても帰国を望むべきではないのかわからない。何故なら、私は皇太子の侍講ではなく、王室の一員でもなくて、一ヶ月教える者の中の不特定の人間の類であるからだ。」と付け加えた。

「*De Cive*」の徹底的な世俗的原理は、亡命皇太子の宮廷の女王ヘンリエッタ・マリアやカソリック教徒には人気がない

く、ホップズは無神論者であるという主張がささやき始められていたが、ホップズは決して孤立していたわけではない。ニューキャッスル伯（ホップズは、一六四六年十月四日付ソルビエール宛書簡で述べたように、伯爵を介して皇太子の「政治学ではなくて」数学の侍講の指名を手にした）を始め、初代アーリントン伯爵ヘンリー・ベネット（1618—1685）、女王秘書官ケネルム・ディグビー卿、経済学者・統計学者・解剖学者（ホップズと共にベッサリウスを読破）のウィリアム・ペティ卿、四二年から四五年までフランスへ亡命した第三代デボンシャー伯、文学上の知己エイブラハム・カウリー、ウィリアム・ダヴェナント、エドマンド・ウォーラー等、多くの高位の知人がいた。従って、ホップズは亡命宮廷から孤立してもおらず、書物が王室の大義に損害を与える可能性は少なかったであろう。一六四七年三月近くには、内乱は、チャールズ一世がクロムウェルと円頭派の捕虜となることによって、事実上、終わったのであった。

ホップズは、その帰国の希望にもかかわらず、その後四年も帰国できなかった。その理由の一つは、ホップズ自身が四七年八月に重い病いにかかり十一月の終わりになっても完治しなかったことである。十一月二七日付ソルビエール宛書簡では、八月半ば頃「すこぶる重くて、下がらない熱に襲われ、……六週間寝続けて、その後熱は下がったが膿瘍が出てもう四週間もベッドに居なければならなかった。」と伝えている。ミンツはこの病気をチフスとするが、チフスは完治されないから、ロゴーは、伝染性扁桃腺炎乃至敗血症カタルであったと推測する。第二の理由は、一六四八年、いま一度のイングランドのスコットランド侵攻で頂点に達する内乱の勃発が考えられる。しかし、フランスも安泰ではない。反マザランのフロンドの乱の第一段階、高等法院のフロンドが四八年から四九年の冬にかけて起こったからである。

そうした政治情勢を別にして、研究面では執筆活動に余念がなかった。ホップズは「自叙伝」で一六四二年から四六年にかけて「De Corpore」の執筆準備に「昼夜わかつた多忙であった」と記している。しかし、「De Corpore」は、チャールズ皇太子が四六年にパリに到着し、その数学教師をつとめるため一時中断され、結局、五五年に出版される。また、五年に出版されることになる、「De Cive」の英語版を自ら英語に翻訳していたし、四六年には論文「A Minute or First

Draught of the Optiques」を書きあげ、ニューキャッスル伯爵に送った。その上、四六年から四八年にかけて「リヴァイアサン」の執筆にとりかかったことである。

「リヴァイアサン」の執筆の着手には、メルセンヌ、ガッサンデイ、そして、いつもDu Verdusに目撃をeddu Verdusの貴族フランソワ・ボヌーの激励があった。マラン・メルセンヌ(1588—1648)は、ラノーシャッドのミニム修道院の修士であった。かれの修道院は、デカルト、ペレスク、ローベルヴァル、そして、「フェルマーの最終定理」(一六三七年頃)のフェルマー(1601—1665)、「パンセ」(一六七〇)を著わすブレーズ・パスカル(1623—72)の父エチエンヌ、姉ジルベルト、そして本人ブレーズ等の一種のサロンの役割を果たした。メルセンヌの思想は広範な博識と極めて狭い神学上の正統派的信念を特徴とするが、それよりも優れた点は学問上の仲介者の役割を果たす能力にあった。ロバート・ボイルは「偉大な『哲学的商人』の一人、科学的知識の伝道者、科学的優越性の再現者」と表現し、ロバート・マートンは「科学の政治家」と呼ぶ。ホッブズは「自叙伝」の中で「誰かが新しい学問の重要な不定命題を発見したとしてもその人がそれを持ちこむのはメルセンヌの所であった。……メルセンヌは、科学の世界のあらゆる星を決定する天の極であった」と賞賛した。メルセンヌは、ホッブズと同年に北部フランスに農民の子として生まれ、若くしてラ・フレシユの有名なジェスイット団に参加し、そこでデカルトと会い、終生の友となった。一六一一年以降、ミニムの修道士に任命されてから哲学に専念していたが、三五年乃至三六年初めにホッブズに会った頃から関心が数学や科学に移り始めた。デカルトの「方法序説」(一六三七年)等の著作が異端によって汚されているとするカソリックの告発に対してデカルトを熱心に擁護したし、また、ガリレオの賞賛者でもあり普及者でもあった。しかし、三三年六月のガリレオ裁判以降、かなりあいまいな思想傾向をとるようになり、三四年の書では教会の聖書解釈上の役割を支持し、地球の運動の問題は未解決のものであって新しい資料によってのみ確認できるとした。

メルセンヌは、ホッブズをピエール・ガッサンデイ(1592—1655)に引き合わせたのだろう。オーブリーによれば、ホッ

ブズはガッサンディを「この世の中で最も優しい心の持主」と思い、「双方互に心から友情を抱いていた」と記す。プロヴァンスの人ガッサンディは、ディーニユとエクス大学で教育をうけ、哲学と神学を学んだ。エクス大学の哲学教授に任命され、しばらくはアリストテレス哲学を解説したが、ガリレオやケプラーに影響され、一六四二年にアリストテレス哲学の批判の書を出版した。四二年にはまた、メルセンヌの要請で、デカルトのある基本命題の反論を出版した。六年後、病い（結核）の為トゥーロンにひきこもったが、五三年に再びパリに戻り五五年十月亡くなった。コペルニクスやペレスクの伝記を除いて、かれの書は批評家としての役割や他人の書の普及者以上に重要でなかった。ホッブズにもさほど思想的影響を与えていない。

ドウ・ヴェルドゥスは、即ち、フランソワ・ボヌー（1620—1675）とホッブズとの交遊は、他の誰よりも多年にわたって親密で友情にあふれていた。かれは、久しく地方議會に代議士を送ったボルドー出身の富裕な一族の出であった。一九才の一六三九年、数学を勉強する為、パリに赴き、到着直後、「接線の方法」に関する見事な解説（久しくローベルヴァルの著とされていた）をものし、メルセンヌの友人となった。一六四四年初頭には、ホッブズに会っていた。また、その頃、ドウ・ヴェルドゥスは、駐ローマ・フランス大使に同行し、イタリアを訪ね、四三年に気圧計を発明した、ガリレオの弟子トリチェリ（1608—1647）と知己となった。その知己から、真空実験に精通するようになった。しかし、財産管理の問題の発生から四五年にボルドーに帰ることを余儀なくされ、そこで、フロンドの乱の歳月を過ごした。五三年頃にはパリに戻り、九月二九日、ベーコンの「学問の発達」のフランス語訳の出版許可を得た。しかし、この本の写本は全く発見されていらない。その後、ドウ・ヴェルドゥスは、ホッブズに膨大な数の書簡を送っている。一六六〇年には [De Cive] の最初の二部（宗教を論ずる部は省いた）のヴェルドゥスの翻訳がパリで出版された。絶対王政の不動の支持者たる彼は、同書をルイ一四世に献呈する際、[De Cive] を学校での必読文献にするよう王に懇請した。唯一の二つの「実証科学はユークリッドの『原理』とホッブズの『原理』 ([De Cive]) である」とルイに奉上了。ホッブズはこの [De Cive] の

フランス語訳に対しドウ・ヴェルドゥスに謝して、一六六〇年に「Examinatio et Emendatio Mathematicae Hordienae」を献上した。また、ドウ・ヴェルドゥスは、それより以前に「リヴァイアサン」の翻訳も考えており、一六五七年一月に第四章のフランス語準備訳をホップズに送ったが、それ以上、計画を推し進めなかった。この準備訳について、アスコリヤステイーンによれば、ソルビエール訳の方が良いとする。ドウ・ヴェルドゥスの晩年は不幸であった。生活上の諸事件に加え、カソリック教会やフランス宮廷の寵愛も失ったらしい。次第に「神がかり症状」を示し厭世的になっていた。七年八月二〇日、ボルドーで亡くなった時、「神は私に友人たちを授け、そして連れ去った。友人たちは私を見捨てた」という妙な遺言状を残したが、恐らくその「友人たち」にはホップズは含まれていないであろう。一六七二年のホップズ「自叙伝」はかれにおくられていたし、七四年三月七日になってもかれはホップズに手紙を送っていた。だが、ホップズはこまめに返事を書いたが、ドウ・ヴェルドゥスがそれらを破ったか、何世紀間に失われたのか、ドウ・ヴェルドゥス宛ホップズ書簡は全く残っていない。

ホップズとルネ・デカルト(1596—1650)の関係については推論をまじえる必要はない。ホップズは、イングランドに居る間に「方法序説」に精通していたし、フランス到着直後、未刊であった「省察」(出版は一六四一年)についてメルセンヌから匿名で論評するよう求められた。メルセンヌはデカルトから友人の間で原稿を回覧することを求められていたし、ホップズとデカルトが相互の尊敬をますよう希望していた。しかし、ホップズとデカルトは最初からといっていいほど互に警戒していた。両者とも相手から学ぶべき重要な点があるということを示さなかった。指導的数学者の多数と論争し、ガリレオを賞賛することですら異常なまでに渋ったデカルトは、性格や人格の点でホップズに似ていた。デカルトは自分の信念のために「殉教者となる気はなかった」し、ホップズもそうであった。両者には、ヴィジュアル・センスが全くなかった(芸術作品や風景の素晴らしさは、著作の中で何一つふれられたことはない。)両者とも結婚しなかったし、個人的な癖ではかなり自己中心であった。しかし、類似点があったとしても、学説上の相違の方が優先した。デカルト

の「省察」に対するホッブズの「反駁」にみえるように、根底的には、デカルトの二元論や、そして、とりわけ、魂の實在を立証したとするデカルトの主張にあった。ホッブズは、デカルトの「省察三」にある「Cogito ergo sum」に異議を申し立て、思考活動は考える「私」を想定するのだが、デカルトが主張したようには、思考活動は考える私を切り離して理解できないと論じ、また続けて、デカルトの主張とは逆に、思考は「心、精神、理解、理性」等の非物体的な事柄に帰属されえないとした。そのように帰属することが意味をなすとすれば、「私は思考であるが故に思考を働かせる。……同じやり方で、私は歩行であるが故に歩くともいえよう。……従って、考える物体が、心、理性、理解力の主体であり、実体的なものであることが可能である。」と反論した。物体の触知性や有体性を主張し、また、信仰や理性によって人間は、神が何であるかではなくて神が存在することのみを知りうることを確信する唯物論者として、ホッブズは、自然界で神、靈魂、精神的なものが可視的で測定可能な対象と同様に実在的であるとすると二元論を決して受け入れられなかったし、まして支持できなかった。ホッブズは、とりわけ、神が実在することを「証明した」とするデカルトの仮説に対して強い異議を唱え、また、デカルトの信心深さは真摯というよりは便宜的だと常々疑ったらしい。「しかし、神という最も聖なる名についていえば、それに相応するいかなる像、いかなる觀念もない。……ところが、幾度も火の傍に近づかされ暖かくなることを感じたことのある生まれつきの盲が自分を暖かめるものがあることを知り、それが火と呼ばれるものだと耳にすれば、火の形や色は知らず、火の觀念や像もえていないのに、自分の像や觀念の何らかの原因があり、この原因等に連続して先行する別の原因があるに違いないということを認める人は、最後には、一つの結論……に達する。……それを神と呼ぶ。」と、ホッブズは「反駁V」で評した。しかし、デカルトは、「神の觀念が存在するとすれば（存在するのは明白であるが）、この議論全体は破産する」と答えたにすぎない。デカルトは、「反駁」が全面的に間違った論法だとホッブズを非難し、一六四一年にもメルセンヌからデカルトの「Dioptric」（一六三七年）に関するホッブズの批判——その後、メルセンヌの「Optique」（一六四四年）で公刊された——を受け取った時、激怒さえした。デカルトは、これら

の批判の著者が「De Cive」——一六四二年初版の直後に読んでいたらしい——を執筆した同じ英国人であることに気づいた。「De Cive」について、デカルトは次の様に記した。「著者〔当時、名前も知りえなかった〕は、形而上学に関してよりも道徳についてより優れた精通者であると思う。しかし、至極間違っておりしかもすこぶる危険なかれの原理や主義は到底是認できない。その原理は、すべての人間が邪悪であると想定するか、邪悪であることに口実を与えるからである。かれの全体の意図は、より徳の高いかつ内容の充実した主義に立って、王政を支持するべく執筆することにある。それはかれが執筆したもの以上に有利に働く可能性がある。更に、ローマ・カソリック教会とカソリック教に著しく不利に書いた。従って、かれが特別に、何らかの有力な勢力によって支持されなければ、同書が検閲から免れうるかどうか私には判らない。」ホッブズは、一六四六年五月十六日付ソルビエール宛書簡で「デカルト氏が拙著の出版（本書等）が進捗中であることを知れば、出来れば妨害しようとするのは間違いないと思う。そうしか思えないのです。本当なんですよ」と知らせた。デカルトは、ホッブズの主観的感覚現象説（ホッブズは一六三〇年頃に提起したとニューキャッスル宛書簡で明らかにしたもの）との関連で剽窃だとホッブズを非難し、これ以上我慢ならないと断言した。チャールズ・キャヴェンディッシュによれば（一六四八年八月二日付ジョン・ポール宛書簡）、ホッブズとデカルトは一六四八年に会い、「議論を少し、し」、一致した面もあったらしいが難しいことについては「はなはだ」一致しなかった*。

※ 福鎌氏によれば、デカルト・ホッブズ会見に関するテンニエス以降の「定説は極めて根拠が薄弱である」という。当時（一六四八年七月頃）デカルトが会ったのはガッサンディであり、かれと和解したと示唆する。

福鎌忠恕 「トーマス・ホッブズ著『ラテン詩自叙伝』」、東洋大学大学院紀要第一八集、一九八一年、四五頁

デカルトがホッブズに対してよりもホッブズがデカルトに対して尊敬していたが、オーブリーによればホッブズのデカルトに対する最終評価は次の様であった。デカルトが「幾何学だけに打ち込んだなら、世界で最高の幾何学者となっただろう。かれの才能は哲学に向いていなかった。……（ホッブズは）全質変化説を弁護した一文をデカルトが書いたことだけは赦すことができなかつた。その説がかれの説に全く逆らうものであるし、イエズス会へのお世辞にすぎないことは、デカルトにもわかつていた。」続いて、「イエズス会は当時誇り榮えていたので〔デカルト〕氏はそこで教育を受けた……。イエズス会が氏を使喚して、あの論を書かせたというのもあり得ぬことではない」とオーブリー自身の注を付け加えた。ホッブズがイングランドに帰国し三年少し経ってデカルトとの接触は断たれた。

一六四八年九月、メルセンヌが亡くなり、ほぼ同じ頃、ガッサンディは南フランスへ旅立ったし、ドウ・ヴェルドウスは家業の事情のため長期にわたってパリを離れていた。英国の亡命宮廷や、フランス宮廷、そしてカソリック教会からもホッブズは孤立を深めた。オーブリーは、四〇才になってからのホッブズは「だんだん健康になり」、「生き生きとした赤味のある顔色」になったと伝えるが、一六四七年から五一年にかけて少なくとも二度の重病にかかった。これらの病気の一つは、一六五〇年以前からパリで始まり、それ以後、徐々に昂じた「両手の震え」（オーブリー）にひきおこされたのかもしれない。ホッブズが六〇才の頃、即ち、一六四八年の初めの頃から、脇腹の痛みと歩行が覚つかないことをソルビエールに語った。一六五〇年前後、間もなく、ホッブズはパーキンソン病に似た症状を示し始めた。本や手紙を口述するためにホッブズがいつ召使等を雇い始めたかわからないが、オーブリーによれば、六五年か六六年以降は書いた文字はとも読み易いとはいえず、亡くなる数年前には「麻痺のために自分の名を書けないほどであった。」一六五一年八月、ホッブズは再び重病にかかり、フランス人医師、学者、蔵書家のガイ・ペタン（1601—72）の治療をうけた。九月二二日付ペタン書簡は、「かれが極めて悪い状態であることを知った。呼吸狭窄、苦痛、嘔吐——そうした苦しみのために自殺を考えたに違いない。かれは、克己の、憂鬱症的な、その上イギリス人気質の加わった哲学者である。食事や入浴で少し軽く

したが、しかし、瀉血する必要が大いにあるのに、六四才であることを理由にそれを拒んだ。私は気にいられているので、翌日、瀉血することが許され、それが大いに助けとなった。かれの年齢では誰でもそんな悪い血をもつとは考えなかったと、後日、言い訳をした。その後、我々は同志にして大親友になった。かれが欲しがったので、ビールを少し飲ませ、下剤をかけた後、すごく良い感じであった。かれはすこぶる感謝して、イングランドに帰国して何か美しいものを送りたいといった。すぐに帰国できて歓びのあらんことを。気がねなく。」と伝えた。ホップズが数ヶ月後にイングランドに居たかどうかはわからない。ペタンによって治療をうけた病いは長引いた可能性がある。一七五〇年のホップズ英語版著作集にあるホップズの伝記草稿によれば、かれのイングランド帰国は「胃の不調のためでもあった。それは適切な薬の使用によって完全に回復した。」と伝える。

五 『リヴァイアサン』

ホップズが亡命していた一一年間、イングランドにおける最大の変化は、君主政から共和制コモンウェルスへの政体の変化であり、しかも、その激動とその後の余震の中で、ホップズが関係した知的サークルや多くの知人たちは既に亡くなっていた。

ホップズ自身も、良きにつけ悪しきにつけ、政治・宗教に対するその見解が王室や庶民によく知られる論争上の人物になつていた。一六五〇年に『法の原理』が二分冊で、即ち、「人間性論」及び「政体論」の形で出版されていたし、『市民論』の英語初訳が帰国前に刊行された。(『トゥキユデイデス』の二回の増刷が一六三四年と四八年に行われた。)

ホップズは、一六五一年十一月乃至十二月にドーヴァーに上陸した。それよりも半年前、フランシス・ゴドルフィンへの献辞の奥付「パリ、一六五一年四月十五日」をもって『リヴァイアサン』が「一六五一年の半ば頃」(ステイブン及びロバートソンによれば)に姿を現していた。十月の終わり頃、後のチャールズ二世にベラム革で装丁された『リヴァイ

アサン」書写本が献呈された。チャールズは、ウスターでの敗北後、パリに戻り、同地で同書を受け取った。(同書は、英国国立図書館に現存する。)「リヴァイアサン」に関して、ホップズの大逆的暴動的主義があるとする密偵の報告やクラレンドンの中傷も合わせてチャールズの耳に届けられた。

(「リヴァイアサン」の内容についてはロゴの叙述には新しい展開はなく概説的なものであるから割愛し、書誌学的及び図像学的論及に限定し、以下、紹介する。)

「リヴァイアサン」初版は三様ありすべて一六五一年の奥付であるが、第一の版だけがロンドンで公刊された。ロンドンでは英語版は一八世紀まで印刷されることはなく、一八世紀以前にロンドンで印刷されたのは、別の二様のラテン語版で、それぞれ、一六七六年と七八年に現れた。(ピープスは、一六六八年九月三日の日記に「この頃絶賛されているホップズの『リヴァイアサン』を本屋に求める。以前、ハシリングで売られていたものを、今度は古本屋に二四シリリングで譲り、それは三〇シリリングで売りに出されている。それは、^{レシヨフ}教会が再版させない書物である。」と記している。)別個のラテン語版初版(一六七〇年)、オランダ語版(一六六七年)、及び「リヴァイアサン」を含むラテン語版ホップズ著作集(一六六八年)がアムステルダムで出版された。

初版本三様の刷は、表題紙下部の装飾によつて区別される。その真正の一刷は、その装飾が「頭」^{ヘッド}であるので「ヘッド」版乃至刷として知られる。「セント・ポールズ・チャーチヤードのグリーン・ドラゴンの」印刷屋アンドリュウ・クルックは、一六七四年に没する迄、ホップズの他の諸著作も印刷した。その後は、息子のウィリアムが事業を続けた。第二の刷は表題紙下部に「熊」^{ベア}が刷り込まれているので「ベア」版といわれる。その版も印刷屋として「クルック」を掲げるが、恐らくオランダで印刷されたらしい。「熊」の装飾は「一六一七年から一六七〇年の間、オランダで印刷された書

籍にのみ」みいだされる証拠である。「序説」の第一頁は、翼をもつ二人の人物と、中央に「C.C.」のイニシアル入りの聖クリストフォールの装飾画を上部にかかげる。聖クリストフォールスやイニシアルは、アムステルダム印刷業者 *Offici-stoffel Conradus* (乃至 *Conradus*) を表すと思われる。かれの事業は、当時、活気をおびていた。第三の刷は、表題紙下部の「装飾」^{オナメント}によって、「オナメント」版と呼ばれている。その刷も印刷業者をクルックとしているが、一六六八年以後のある時、恐らく一六八〇年に近いある時にオランダで印刷されたのであろう。

更にまた、三様の初版は、表題紙装飾画にある別の違いによって区別される。三つの刷には同じ図版が使われたのであろうが、「ヘッド」版の複写は、他の二つの刷より暗くかつ線が鋭い。「ベア」版のそれは、かなりぼんやりとしてすり切れており、また「オナメント」版のそれは修正されていて、例えばリヴァイアサンの王冠や剣のつか、手や顔や、またその背景の風景に陰影の相違を示している。

三つの刷には原文上の相違もある。「ヘッド」版では、目次に続く正誤表は、訂正がなされなかつた原文上の誤字や誤植と正確に一致する。「ベア」版では、正誤表は「ヘッド」版と同じであるが、綴りの誤りなどの幾つかの誤植が訂正されている。「オナメント」版の正誤表は誤植を含んでいるし、「ヘッド」版や「ベア」版の誤植がより多く訂正されている。更に、「オナメント」版の製本に使用された型と用紙は、他の二つの刷と異なる。

「ヘッド」版自体についても複写は一樣でない。この版の表題紙装飾画には五ヶ所以上の異なつた透かしがあるのだが、透かしが全くないものもあり、少なくとも六つの異例があることを示している。また、幾冊かの大型写本があり、それは他の写本より一インチ乃至一インチ半ほど長くて広い。こうした事情から、クルックが印刷の全責任を引き受けたのではなくて分担して他の業者も印刷した可能性がある。(ラテン語版「リヴァイアサン」の出版史も同様に複雑であつて、一六七〇年版と一六七六年版は同一であるが、一六七〇年版の最初と最後の二頁の型が異なっているし、一六七六年版の照応頁数が異なっている。一六七八年版は一六七〇年版の正確な複製であつた。)

初版本に関する今一つの問題は、表題紙装飾画を描いた画家を特定する問題である。一八九八年に、ヴェンシスロース・ホラー（一六〇七—一六七七年）の作品目録によって、装飾画がかれのものとされた。ホラーは、プラハ生まれの画家で、イングラント亡命中の銅版師、しかもホッブズと知己であった。しかし、一九三四年、イギリスの装飾画表題紙に関して最も信用される目録は、銅版師は不明であると書き留める。装飾画がホラーの作品であることに疑問を呈する人々は、ホラーによって描かれたとすれば、粗雑すぎ細部が不正確だと論じて来た。描写されている建造物、中でも、小さな左側パネル画の要塞型の建物や正反対側の小教会はホラーの建築知識を反映しておらず、また、装飾画表題紙の上部にある「……権力はない」で始まる題辞はホラーの字体とは認められないと主張した者もいる。他方、チャールズに献呈された写本の装飾画の描写はホラーを連想させた。キース・ブラウンは、この装飾画を入念に研究し、以下のように述べる。

「例えば、とりわけリヴァイアサンの顔の表現に目立つ線画の殊に『柔らかな』特質は、ホラーのトレード・マークそのものといえるほどで、また、かれは人物像がかなり苦手であることはリヴァイアサンの多少力強さのない手首の部分に反映されていると考えられよう。しかし、より強いしは、リヴァイアサンの眼の処理にみいだされる。これは、ホラーの他の作品にもみいだされるものである。」従って、結論的には次のようになる。「ホラーが、チャールズ二世に献呈された線画表題紙の画家であり、また、表題紙装飾画は、ホッブズによってかれの原稿と共に送付されたホラーの線画に基づいてイングラントで作成されたものである。同書の意図を表現する上で影響度をかなり減じられた版画は、画家や著者本人のいずれかと接触のない職人によるものであることを示していると考えられる。」

いずれにせよ、ホッブズとホラーが緊密に協力しあったことは疑いない。ホラーは内乱時代をオランダで過ごしたから、ソルビエールが出版の取り決めをした可能性もあるものの、ホッブズがパリかアムステルダムでホラーと直接に取り決めた方が可能性大である。こうした協力関係が、『リヴァイアサン』のホッブズの意図を表題紙の画像に見事に反映させている。装飾画下部左側に五つの小パネルを描いて、自然状態と「万人の万人に対する闘い」（最底部のパネルにある戦場）

から戦闘の終了(次の二つのパネルにある山積みされた兵器類と停止中のキャノン砲)を経て、主権(下から四番目のパネル)を象徴する王冠、及び権力の座(一番上のパネル)を表わす要塞化された城乃至要塞に至る市民社会の出現を表現した。装飾画下部右側の宗教的テーマを扱うパネルは、下から上へ読みとつていくと、教義問答に決着をつける教会会議、恐らくカソリック教徒とプロテスタントの分裂及びピューリタン、長老派、国教会派間のイギリス教会内部の分裂を象徴する二又と三又の宗教的武器の集塊(コレクシヨン)(ロバートソンは、このパネルの主題を、「論理的な剣術の武器」《三段論法という三又のフォークと、ディレンマという角をもつ他のフォーク》、そして、それと直接に交叉する「鎧」と解す。九つの又のそれぞれには標語があり、左から右へ、「Syl-」、「logis-」、「me」、「Spiritual」、「Direct」、「Indirect」、「Temporal」、「Real」、「Intentional」と読める。又を接合している角は「Dilemma」と表示されている。)、稲妻を放つ霊のようにみえるもの(敵対する宗派に雨を降りそそぐ神の怒りであろうか)、宗教的権威を象徴する司教冠乃至主教の帽子、そして、宗教的な権力の座を示す教会を描いた。これら一〇個のパネル、及び町や田舎を擁するそれらの上部の風景を支配するのは、無論、リヴァイアサン、つまり、ホップズのいう「可死の神」であり、それは右手に国家を象徴する剣と左手に宗教を象徴する司教杖を握っている。リヴァイアサンの身体は、小さな人物の無数の頭と背中上部で構成され、かれら全員が見物者というよりリヴァイアサンに向かい合っている。その意味こそ、ホップズにしてみれば、かのリヴァイアサン、即ち「国家(ラテン語のキウイタス)であり、それは人工的人間にほかならず」、「自然人」を動かすそれによって動かされるものである。(ブラウンによれば、プラハでホラーはマニエリスムの画家に「親近感」を抱いたが、かれらの得意の手法の一つが「人物の構図であり、その輪郭は屢々象徴的に意義のある小人物によって構成された。」ホラー自身、そうした手法を身につけていたことで知られる。)

『リヴァイアサン』をめぐる難問は、一六五一年の英語版と一六六八年初版のラテン語版との関係である。英語版がラテン語版に先行して書かれたということは常識だとみられていたが、一九三二年、ラテン語版全体ではないにしてもその

多くの部分は一六五一年に先立ち何年にもわたって執筆されたトルビエンスキーが主張した。一九六四年には、F・C・フッドがこれを支持した。単調で粗雑、しかも屢々不正確で難解なラテン語版に比べると、思想の明哲さや洗練された表現様式を持つ英語版の質の高さは、後から出版されたラテン語版が英語版から翻訳されたりそれに依拠したことはありえないようにみえる。つまり、ラテン語版は、そもそも極めて大雑把で不正確な最初の草稿として供されたといつてよい。また、内^{シヴィルウォー}乱に関するラテン語版の記述は、内乱が終わつてずと後であるよりも終る前に書かれたかのように現在形で言及されている。例えば、英語版は「イングランドにおける最近の諸紛争については、多くの人が、……満足をもつてみてきたということだけは……」と表現するのに対し、ラテン語版は「祖国の多くの人々が、戦争、つまり、現在イングランドで闘^われ^てい^る戦争を好意的にみ^てい^ることを……」という。「リヴァイアサン」のフランス語訳を果たしたトリコーは、ラテン語版をも徹底的に研究し、「ラテン語〔版〕」「リヴァイアサン」の大半は、英語〔版〕以前、およそ一六四八年から四九年にかけて執筆され、それは「市民論」の教義と英語版「リヴァイアサン」の教義との中間にあるホッブズの思想状況に照応する」という。英語版とラテン語版の関係について多くの学者の種々の解釈があるが、言い争う余地のない一致点は、英語版の最後にある「総括と結論」がラテン語版にはなく、また、ラテン語の三つの付録、即ち、「ニケア信仰箇条について」、「異端について」、「リヴァイアサンに対するいくつかの反論について」が英語版にないということである。いずれにせよ、英語版とラテン語版の関係にまつわる問題は、ラテン語版の完全な英語訳を待つよりほかに、決定的な解決策をみないであろう。

六 種々の論争

デリー主教ジョン・ブラムホール（一五九四—一六六三）は、アイルランドで、以前、トマス・ウエントワース（後に

ストラフォード伯爵となる) 付きChaplain牧師を勤めていた敬虔な国教徒で忠実な王党派であった。ブラムホールは、大主教ロド等と同様、アクスブリッジ会議によって大赦から除外され、一六四四年海外に逃亡した。新体制に王党派を和解させる目的の一六五二年保護 (Indemnity) 法からも今一度除外され、ブラムホールは屢々病いと貧窮に陥りながらも、一六六〇年の王政復古に至るまで海外に留まることを余儀なくされた。

ホップズは、一六四五年乃至四六年、パリにおける恐らくニューキャッスル伯レジデンスの邸で、ブラムホールに最初出会ったらしい。ブラムホールは、王権神授説を堅く信じていたし、その国教会正統派的信念から、カソリック派、長老派、無神論に対しほぼ等しく敵対しがちであった。かれは、恐らく、いかなる論点についてもホップズの見方に殆ど関心を抱かなかつたであろうが、どういうわけか、二人は自由意志論争に巻き込まれることになった。場に居あわせたニューキャッスルは、かれらの考えを書き著わすよう求め、兩人もそうすることに同意した。ホップズは、ニューキャッスル宛の長文の書簡乃至報告の形をとるかれの論文が出版されないことという条件を主張した。生憎、この条件に対し、英語に堪能でないがその場に居あわせたあるフランス人が、ホップズの説をフランス語に翻訳することを許可するようにニューキャッスルを説き伏せた。その結果、翻訳は、ホップズ賞賛者でウエールズ・キッドウエリーのジョン・デーヴィスなる人物によつて着手された。デーヴィスについては殆ど知られていない。かれは、自分勝手にホップズの論文を写したに違いない。というのは、八年後の一六五四年に、デーヴィスは、ホップズの許可もなく、しかも、まだフランスに居たブラムホールに何も知らせずに、その論文をニューキャッスル宛のホップズの長文の書簡の形でデーヴィス自身による短い無署名の序文をつけ出版したからである。こうした経過もよく知らず、ブラムホールは二重に欺されたと思ひ込んだ。論争は六年前に始まったのだから、ホップズ書簡の末尾にある「一六五二年八月二〇日」の日付ですら嘘だと訴えた。ホップズの論文の題名——その題名によつてブラムホールは怒りを焚き付けられた——は、*Of Libertie and Necessitie: A Treatise wherein all Controversie concerning Predestination, Election, Free-Will, Grace, Merits, Reprobation, &c. is fully decided and cleared, in*

answer to a Treatise written by the Bishop of Londonderry, on the same subject.」であった。ブラムホールの怒りの返書は、一年後の一六五五年に現れ、それに対しホッブズは、一六五六年、かれの立場について書物大の再論でもって答えた。しかし、論争は終わらなかつた。一六五八年にブラムホールは、ホッブズを反駁する別の労作を出版し、これに「Appendix concerning The Catching of the Leviathan, Or the great Whale」と名付けた。再々度、ホッブズは一六六八年に論説をものしたが、一六六三年にブラムホールが亡くなったので、これが最後の論説となった。これは、ホッブズが亡くなった三年後、即ち、一六八二年になって初めて出版された。

ブラムホールは、イングランドやアイルランドへの帰国を禁じられていたから、「Of Libertie and Necessitie」の出版の延期も阻止もすることができず、ホッブズが一方的に出版してブラムホールの不本意の不在につけこんだと思ひ込んだし、また、ブラムホールにすれば、かれらの自由意志論争において弱い立場におかれたと確信したに違いない。かれはまた、「思慮分別のある読者に向ける書物」にデーヴィスが「品のない書簡体」の序文をつけることをホッブズが許した理由が理解できなかった。ブラムホールは、デーヴィスがホッブズを「当代の大家」と呼び同書を前代未聞の「価値の高い」「珠玉の作品」と呼んだことを洩々認めたかもしれないが、高位の聖職者としては、かれはデーヴィスの以下のような申し立てに当然激怒したのであった。即ち、ホッブズは「かくも薄い本で、聖職者たちすべての部厚い作品以上のことを果たしたし、……また、これを果たすのに、かれは、この種の論争に関して自らかかわるのを毛嫌にする性格からだけでなくかれの真摯な数学研究からも、いかなるそうした小衝突をもまさしく免れうる人物なのである。一般的に、聖職者たちは一種の無学な鑄かけ屋であつて、人々の良心をいやし直すかれら自身の専門職について自分たちがみつけた以上に穴（欠陥）をつくりだすと結論せざるをえない。」これでも侮辱が足りないかのように、デーヴィスは以下のように結論づける。「Of Libertie and Necessitie」は「我々の大いなる嫌疑や気晴らしや貴重な時間の浪費に対し、国教会やイエズス会や非国教会の牧師たちが供したあらゆる書物、否、書庫以上に、同書が扱う諸問題にはより多くの証拠と確信を含んで

いる。」ブラムホールは、これらの非難を蔑視し、無名のデーヴィスに対し「卑しいおべっか使いがするように、勝手に手をもんで蜜よりも唾が甘いと言え」と切り返した。

ブラムホールがホッブズは不誠実だと非難するのに対し、とりわけ、同書がホッブズの責任に関する「見識の忘却乃至変更のいずれかによって」出版されたと主張するのに対して、ホッブズは自己弁護し、**「Of Libertie and Necessitie」**は「私が預かり知らぬところで、しかも（かれ「デーヴィス」が知っているように）私の意志に反して出版されたのである。従って、かれは私に許しをこうている」と述べた。しかし、ホッブズは「ブラムホール大僧正は、……【問題を公表することによって真理は誤りから払拭されうる】という狙いで執筆すると述べ」、その狙いは出版されないとかなえられないから、ブラムホールは二人の論争を非公開にとどめておくつもりであったかどうか疑わしいと述べて、決して謝まろうとはしなかった。

これまで、どの学者もホッブズの弁明の正当性について問題にしてこなかったが、それは恐らく**「Of Libertie and Necessitie」**の二つの版——そのいずれも一六五四年に出版されたが——に関して不十分な下原稿が用いられたためであろう。第一の版は、定評のあるホッブズ著作目録によれば最終日付は一六五二年と伝えるが、第二の版の日付は一六四六年に訂正されている。日付の変更を除けば二つの版は同一である。ブラムホールとホッブズの論争の一端は、日付の問題にあったが、それは第一の版の日付の誤りに原因がある。第二の版の日付の訂正は、デーヴィス乃至ホッブズ（あるいは誤りに気付いたある人間）が、第一の版と第二の版の間に、例えばブラムホールの論評を含めて他の変更がなされたような期間に、印刷業者に接触しそれによってブラムホール自身の一年後の書物の出版の先手を打ったに違いないことを示す。

二つの版は、ヒュー・マクドナルドとメアリー・ハーグリーヴズの**「Thomas Hobbes : A Bibliography」**（一九五二）にナンバー四八及び四九として掲載されている。二つの版が同じ印刷業者によって一六五四年にロンドンで出版されたことは問題はない。しかし、マクドナルドとハーグリーヴズによるその二つの版の配列は、イギリス人書籍商でホッブズ研究

の権威リチャード・ハッチウエルによって問題にされている。ホップズの自著及び研究書の一九七九年八月のハッチウエル蔵書目録——蔵書はその後、日本人書籍商によってすべて購入された——は、そのものがホップズ著作目録である。ハッチウエルは第二の版が重要であるという。その根拠は「より良い句読点、大文字、本文の点で、……より優れた印刷である」ことにある。しかし、かれは、日付の変更の重大性については検討していない。モルズワースは、ホップズ著作集の編集の際、一六五二年なる日付を問題追求して、「一六五四年の第一の版では、その日付は一六四六年である」と解釈したが、ハッチウエルはかれと同意見であつたらしい。

ところで、自由意志に関するホップズ——ブラムホール論争の詳細は、ステイブン、レアード、ピーターズ、ミンツの各研究に譲り、簡単に要約すれば、人間は善や悪、即ち、神法に対する服従や不服従を自由に選択するというブラムホルの確信に対し、ホップズにしてみれば、内的・外的運動の相互作用によって生ずる「熟慮」をブラムホールが意志だと想像しているのであつて、また、人間的行為現象は意志そのものであつて意志の結果ではなかつたのである。(もつとも、T・S・エリオットやボウル等のホップズ批判者の見方によれば、論争はブラムホールの方に説得力があるとする。)

一四年後、一六六八年に、ホップズはブラムホールともう一度論争に関わつた。一六六八年に執筆され、一六八二年(死後)出版された『An Answer to a Book published by Dr. Bramhall』の「読者への序」で、ホップズは、自分を無神論だと非難しているブラムホルの『An Appendix concerning The Catching of the Leviathan』(一六五八)に対処すると主張した。ところで、その「序」で「凡そ三ヶ月前まで同書のことを伝え聞いておらず、閣下の著作について全く話もなかつた」と記しているが、『An Appendix』出版のわずか二年前の一六五六年に、ブラムホールがそうした本を執筆することを熟考しているとはつきり述べたことと矛盾している。一六五六年に初めて出版された『The Questions concerning Liberty, Necessity, and Chance』の冒頭にある「読者序」で、「かれ(ブラムホール)自らが私(ホップズ)の学問が慈悲と政治双方に有害ですべてに関し破壊的であることを証明しよう」といつている。私は、かれ乃至かれらがかくも時間を浪費

1650-60年にかけてロンドンで出版乃至再版された書

簡 約 書 名	版の数	発行年
Leviathan	1	1651
Human Nature	5	1650、1651 (two)、1651 (two)
De Cive (Philosophical Rudiments)	1	1651
De Corpore	2	1655、1656
De Homine	1	1658
Of Libertie and Necessitie	4	1654 (two)、 1655、1656
The Art of Rhetorique	1	1615

することを望まないが、しかし、そうすることがかれらに必要ななら、かれらの書物にふさわしい題名、即ち、『Behemoth against Leviathan』を与えようというのが、私の答えである。」と述べている。

それにしても、ブラムホールが亡くなって五年も経過した一六六八年に、ホッブズは何故反論を書いたのだろうか。

一六五〇年から六〇年の間、ホッブズはその王党派的な考えにもかかわらず、護民官政治の下にあって、かなり自由に意見を表明し、その一〇年間、主著のうち七冊を出版乃至再版し総計一五版にのぼった。

一六六〇年からホッブズ没後の一六七九年までの一九年間に出版が許可されたのは以下の書物だけであった。一冊の例外があるが主要にはラテン語で著されたもの、即ち、数学や物理学を論じたもの、『トウキュディデス』第二版、ホメロ

スの翻訳本、『De Mirabilibus Peccii』の二つ以上の版——そのうちの
一つは英訳された——である。その時期に出版された唯一の英語による書は、別の問題に触れる『Mr. Hobbes Considered』(一六六二)であつて、同書でかれは、国王に対する不忠とクロムウェルに対する追従をウォリスが批難したことについて、自己弁護をした。一六七九年に『Behemoth』の四つの別個の版が無名の印刷業者によって印刷されたがそのいずれも出版が許可されなかったか、あるいはホッブズの承諾を得られなかったためか出版されず、ホッブズの死後三年たつて一六八二年に初めて正式に出版された。

一六六〇年以降、ホッブズにとって厄介な事態は、出版事情よりも、チャールズ二世の復位に伴ってやってきた。チャールズとホッブズの個人的な関係は友好的なものであつたが、チャールズの復位は、国教

会が、その他の宗派に対する支配的地位に復帰することを伴っていたし、また、無神論者、異端者、教皇派等に対する迫害を呼びかける新たな扇動となった。こうした雰囲気の中で、「ホッブズ主義」という言葉が、無神論、不道德、扇動からなる哲学を指すようになっていた。その後ほどなく、敬虔な信徒によって神の罰と考えられた大ペストの流行と一六六六年の大火災が生じた（一六六四年から六五年にかけて大流行したペストで、推定六八、五九六人のロンドン市民、つまり、ロンドン市人口の約一五%の人々が亡くなった。一六六六年のロンドン大火では、死者はわずか六人であったが、一三、二〇〇軒の家屋、セント・ポール大寺院を含む八六の教会、ギルド・ホール、王立取引所を含め、建築物四三六エーカーが破壊された。）ことから、全能の神の心をひどく損ねた著作や行為に切迫した関心と呼びおこし、なかでもホッブズの書物は避けられない状況に陥った。一六六六年九月・十月に、庶民院委員会は、以前の「無神論及び邪教禁止法案」との関連で「無神論、瀆神、邪教の傾向のある、即ち、神の本質と属性に反する書、とりわけ、……ホッブズ氏の所謂『リヴァイアサン』なる書に關係する情報を入手し、その思想内容を庶民院に報告する」権限を与えられた。一六六七年一月三十一日、法案は委員会で承認され、貴族院に委託されたが、それについてそれ以上何も審理されなかった。しかし、一時ホッブズは異端者として処刑される真の危険状態にあると確信したらしい。オーブリーによれば、ホッブズは「自分の書類が（かれらの）命令で搜索されはしないか」と恐れ、「その一部を焼却した」とかれに語った。ケネット主教による別の報告によれば「かれの心にのしかかる恐怖のためにかれら（デボンシャー家の人々）はすこぶる沈鬱になった。かれは自分について、危害は全くないつもりだし、また、全然強情な人間ではないし、また、適宜速やかに満足させる用意があると、かれらに告白していると思える。」という。

従って、ブラムホール没後の今ではブラムホールの反論もないし、ブラムホールによる無神論批難をうまく反駁できれば、「適宜な満足」をもたらすのに役立つと考えたのかもしれない。続いて、ホッブズは【An Answer】の「読者序」で「無神論、不信心等の言葉は、ありうる最大級の中傷の語であるが、私の政治原理の誤りは、……—なにか誤りがあ

るとしても——私の不名誉には決してならない」と述べ、「リヴァイアサン」における政治に関するブラムホールの批判に反論する必要を認めなかった。(また、この「An Answer」の補遺をなす論文が、一六八〇年に初めて出版された「An Historical Narration concerning Heresy and the Punishment Thereof」である。その中で、ホップズは、異端事例の裁判権を有していた高等宗務官裁判所が内乱以前に廃止され(一六四一年七月五日)、しかも再建されなかったから、自分も自分の書物も公式に異端を理由にとがめられないと論じた。その論文の結論でパウロの言葉(「テモテへの第二の手紙」二—二四)、即ち、「主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であつて、よく教え、よく忍び、反対する者は柔和な心で教え導くべきである」という言葉を引用した。)

ブラムホールの「リヴァイアサン」分析の全体傾向やかれの国教徒的な熱意といったものは、一六五五年のかれの「The Catching of the Leviathan」のフル・タイトルによく示されている。そのフル・タイトルを翻訳で示せば以下のとおりである。「ホップズ氏の自著たる「リヴァイアサン」の捕獲、即ち、巨鯨狩。徹底したホップズ主義者たる者は誰も、善良なキリスト教徒でも、良きイギリス国民たりえず、また自己矛盾するものである。その理由は、氏の学説が、すべての宗教のみならず、すべての社会に破壊的であり、国王と臣民、親と子、主人と召使、夫と妻の関わりを失わせ、明白な矛盾にみちみちていることによる。」ブラムホールは「John Bramhall, D.D. and Bishop of Derry」と自署した上で、「箴言二二—一九。眞実を言うくちびるは、いつまでも保つ、偽りを言う舌は、ただまばたきの間だけである」を付け加えた。「眞実を言うくちびる」とは、ブラムホールによれば、政府をつくりあげるといふことが「火薬をつくる」ことよりも複雑な事業であるから、特定の公式や自明の規則に還元しえないといふことを意味した。統治術は数学の原理に似た科学的原理を基礎にしうるしまたすべきであるといふホップズの信念に異議を唱えたのである。ホップズが「リヴァイアサン」の中で統治はテニスのゲームに似ていないとした例をブラムホールは、態々、用いて、「国家政策は、時間、空間、人間の問題や状況に全面的にかかわっており、完全に問題から抽象化される数学や幾何学に全く似ていないが、テニスのゲー

ムにはよく似ている。……数学や幾何学には自由を扱う領域は存在しない」という。ブラムホールは、人間の自然状態が戦争状態であるとするホップズの見解も容認しえなかった。人間は「熊や狼、……あるいは最も獐猛な野生の動物よりも悪い」のであって、動物は一定の種類の範囲内で相互にえじきにする以上には、習慣上、自分たちの種をえじきにすることはない。文明の興隆は、戦争が人類の恒常状態であるというよりも偶然事であるという事実を立証するし、また、戦争が勃発する場合、それは全く残酷で残酷な出来事ではなく、それ自体の規範や法に則って闘われる。「何らの宗教、何らの統治、何らの自然・市民的シヴィル法も持たない墮落した無秩序の群衆は全然存在しなかった。最も未開のアメリカ人は別にして（若干の犯罪癖は除いて）容易にかれの書物の中に発見される以上に、生まれながらの慈悲や正直さの信念がある。」

「T・H氏には、かの子午線（経線）が計算され適合されるように、かれのいうアメリカ政府を樹立する唯一の特権があるべきである。……しかも、その地で政治が成功すれば、そこに特権を植えつける自由がある。……アメリカ人がかれをその主権者に選ばないかどうか誰が知るのだろうか。しかし、かれが主義主張を命ずるように、いかめしくそれを実践に移すならば、かれが想像する臣民は、かれらの齒で可死の神をはからずもくいちぎりその腹わたは主権の墓となるであらう。」

ブラムホールとの論争とは別に、数学者との重大な論争がある。オックスフォード大学サヴィル講座担任教授で牧師のジョン・ウォリスやセス・ウォード、（一六一七—一六八九）、そして、オランダの数学者で天文学者クリスチアン・ホイエンズ（一六二九—一六九八）等、多くの者がこれに関わった。ウォードは、四〇年も前に、「F.B.」（オックスフォードの書籍商フランシス・バウマン）イニシアル署名入のホップズ「人間性論」に親しみを込めた序文を寄せていたが、「リヴァイアサン」にある大学批判を契機に、一六五四年に、大学擁護の点と、ホップズが少なくとも二つの訴因で剽窃の罪を犯したとするとがめの点からホップズと対立し始めた。ウォードはその「Vindiciae Academicarum」で、デカルト、ガッサンデイ及びデイグビーは感覚は運動を本源とするという理論を發展させた点でホップズを評価していたと主張し、

また、ホッブズの光学上の発見は、レンズや拡大鏡によって実験作業を行っていた科学者ウォルター・ウォーナーの研究に基づいていると断言した。更に、かれは、ホッブズに最近の幾何学的発見を出版するよう要求した。ホッブズは、古来からの数学上の難問である円積法を解いたと確信し、*「De Corpore」* (一六五五) で「解法」を示した。ウォリスたちが、ホッブズは問題解決しなかったことを証明すればするほど、ホッブズは強弁し、結局、二〇ほどの別個の「解法」をつくり出したが、しかし、実際上はその問題の「解法」では全くなかった。ウォリスが、一六五五年、その *「Elenchus Geometricae Hobbianae」* でホッブズの「業績」を粉碎すれば、ホッブズは *「De Corpore」* の英語版を一六五六年に出版して別個の円積法の「解法」を示した。今度は、ウォードが *「Thomas Hobbi Philosophiam Exercitatio Epistolica」* を一六五六年に出版して、ホッブズの哲学を攻撃した。ホッブズは、少しもひるまず、英語版 *「De Corpore」* の補遺として *「Six Lessons to the Professors of Mathematicks of the Institution of Sir Henry Savile in the University of Oxford」* (一六五六) を執筆して、ウォリス、ウォード兩人に応えた。ホッブズは、円積法の「解法」が間違っていたことを認めるどころか、ウォードやウォリスを攻撃し、その攻撃はかれらの反撃にもかかわらず、一六七九年のホッブズの死の直前まで終わることがなかった。*「Six Lessons」* でホッブズは、「私が無神論者たりうるだろうか、とんでもない。無神論者だとすれば、私の無神論を出版したまえ」と、無神論や宗教侮蔑という非難に対し自己弁護をはかると共に、かれらを「神の戒律の中で最高のもの」、即ち、慈愛をふみにじったとがめ、「単なる無智で無分別のキリスト教徒」であると非難した。*「Six Lessons」* は、ウォリスの一層の攻撃を引き出し、かれは、*「Due Correction for Mr. Hobbes; or, Schoole Discipline For Not Saying His Lessons Right」* (一六五六) の中で、ホッブズがデカルト、メルセンヌ、フェルマー、ローベルヴァル等から多くの数学公式を盗用したと非難した。その非難に対し、ホッブズは、一六五七年に *「Eitmai; or, Markes of the Absurd Geometry, Rural Language, Scottish Church-Politicks, and Barbarisms of John Wallis, Professor of Geometry and Doctor of Divinity」* をもって答えた。*「Markes」* の中で、ホッブズは、ウォリスの幾何学や宗教論に対する反論を加えると共に、ウォー

ドやウォリスがホッブズの名にひっかけて「英語で hob-goblins (いたずら小鬼) と称する妖精」と称する妖精」とホッブズをからかっているのに対し「意味不明のおしゃべり」のような言葉を使っていると嘲笑し報復した。ホッブズの「*Martes*」に対し、ウォリスは「*Hobbiani Puncti Dispunctio; or, The Undoing of Mr Hobbs's Points*」(一六五七)によって返答した。その後、ほぼ三年間は、かれらのやりとりはなかったが、ホッブズの二冊の出版物で再燃した。その出版物の一つ、「*Examinatio et Emendatio Mathematicae Hodiernae*」(一六六〇)は、ホッブズの学説や再主張と詳細なウォリス批判であり、他の一つ「*Dialogus Physicus*」(一六六一)は、立方体倍積問題——与えられた立方体の体積の二倍に等しい体積をもつ立方体を作れ、という問題——に対するホッブズの「解法」を示すものであった。後者は、今度は、ロバート・ボイルとの論争を引き起こした。ホッブズは、ボイルのエア・ポンプを納得しえないと宣言し、また、真空の存在に疑いを抱いて、ボイルの諸発見や、実験法へと向かう王立学士院の全体傾向に異議を唱えた。ともかく、ボイルは、一六六二年に、「*Dialogus*」に対する丁寧だが断固たる回答を与えた。ボイルはそれで事態が解決したと確信したらしいが、ホッブズは敗北を認めず、一六六二年に「*Problemata Physica*」を著わし、再び、真空の存在を反論すると共に自然界の性質に関する怪しげな命題を唱えた。これにはボイルは敢えて反論せず無視したが、一六七四年にホッブズが、ボイルがホッブズの以前の「解法」を支持したかのように示唆した為に、今一度、別の書物を出版することを決意した。ボイルは、「*Animadversions upon Mr. Hobbes's Problemata de Vacuo*」の序文で、「ホッブズ氏の「*Problemata Physica*」が海外から届いた途端、その題名からだけでなく第三章、即ち「ダイアローグ」にあるみえすいた章句によっても、私が特別に関係していることがわかった。……「しかし」論争的な議論に対し私がついている生来の不快さから、必要と思えない論争を速やかに放置した。また、ホッブズ氏が「*Explications [Principia et Problemata Aliquot]*」(一六七四)を再び出版することによって私に沈黙を破るようにさせない限り、沈黙を断固として貫いた。かれの「*De Natura Aetis*」の「ダイアローグ」については私の「*Examen*」で誤りであることを示しておいた。」と記した。

ホッブズとウォリスは、暫くは対峙状態にあったが、一六六六年から一六七八年に至る迄に、ホッブズは、ウォリスを批判する六冊の補論的な著作を出版し、また、ウォリスと対立する内容の論文を王立学士院に提出した。それらの論文は、二、三名の学士院会員にしか回覧されなかった。ウォリスはホッブズの著作の一つを「たわごと」といい、ホッブズはウォリスの「幾何学や哲学」は「要するに、駄馬が腹部全体をきつく締めつけられすぎてわめいている」ような「誤謬と暴言、即ち、卑しむべき空言につきる」と攻撃し、論争はその内容も言葉も質的に退廃していた。

王立学士院がホッブズを排斥したことは、かれを傷つけ、その晩年を苦々しい思いにさせた。確かに、ホッブズは、数学に関してウォリスよりも、物理学的世界についてボイルよりも通じていなかった。パスカル、トリチェリ、ボイルによって果たされた証明を疑い、真空の空間は存在しないと確信したし、また、潮汐、稲妻等の自然現象に珍妙な説明を与えた。こうした信念は、ホッブズが一七世紀後期の最も精通した科学者の数に入らなかったことを示すが、そのことは逆にホッブズが「全く科学者でなかった」と解されるべきではない。ヨハネス・ケプラー(一五七一—一六三〇)は神秘論者であったし、アイザック・ニュートン(一六四二—一七二七)は占星術や錬金術を信じたし、しかも王立学士院の会員ではなかった。一〇〇人の学士院勅許会員のうちには、オーブリー、第三代デボンシャー伯、デイグビー卿、それにソルビエールも含まれていた。ソルビエールは、偶然であろうがロンドンにいて、かれが敬服したウォリスによって勅許状に署名するよう求められた。ホッブズが会員にされなかったことに、一点の曇りもなく納得しうる、ということではないが、初期の学士院を指導したウォリスやボイルが非科学的で不公平ともいえない。かれらは、ジョン・エヴリン、ウィリアム・ペティ、ジョン・ウィルキンズ博士、クリストファ・レンを含む多くのすぐれた科学者を指導した。王立学士院は、宗教をめぐる思想や思索、まして科学と宗教の両立に関するいかなる議論をも決して奨励せず、宗教は研究や調査の本来の課題ではないと宣言し、学士院規則の一つは、その目的として「自然の事物に関する知識、及び一切の有用な技術、製品、機械による実施、機械装置及び実験による発明を——(神学、形而上学、道徳学、政治学、文法学、修辞学、あるいは論理学をも

てあそばずに)——改善すること」をかかげていた。王立学士院の創設者のほぼ全員を含め、指導的科学家は心底、信心深い人々であつたし、その幾人かはウォリス、ウォード及びウイルキンズと同様、牧師クリスチャンでもあつた。ボイルは、信仰心厚く伝道活動を支え、聖書をアメリカ・インディアン語、トルコ語、マレーシア語、ゲリック語、ウェールズ語等の言語に翻訳する助成金を与えると共に翻訳に尽力した。ホップズが学士院加入を拒否されたのは、数学や政治学の見解ではなく、かれの宗教心、むしろ、かれが神を信じていないと一般的にみられたことであつたといつてよからう。ウォリスは、ホップズが「リヴァイアサン」において神学をもてあそび、「あたかもキリスト教界が思慮分別のある知識をもたないかのように、とりわけ、国教会内外の牧師と一切の宗教を激しく攻撃し破壊している」と一六五九年ホイエンス宛書簡で述べている。しかも、ウォリスやウォード、そしてまた、ボイルも、「リヴァイアサン」を章毎に反証するのではなくて、数学者や科学者たるホップズを信頼させないようにしかれの影響力を殺ぐ戦略をとっていた。学士院の中で、ホップズはことごとく無視された。結局、その時も、ホップズの余生の一七年間も、王立学士院は「かれを丁重に待遇しよう」とはしなかつた。ところが、ホップズの没後、暫くして、学士院は一定のやり方で、つまり、傑出した非会員ホップズの二点の肖像画を壁に架けることによつて待遇を改めた。なお、一九八一年二月現在で、学士院が所有し陳列する肖像画は、ロバート・ボイルが二点、ジョン・ウォリスが唯の一点、セス・ウォードが全く無し、である。

七 晩年

一六五一年からホップズは、種々の論争の関係もあつて、ロンドンに滞在していたが、パリ亡命宮廷に居るかれの敵の感情的昂まりもあつて、一六五九—六〇年の冬は第三代デボンシャー伯と共にダービーシャーで過ごした。

一六六〇年五月二九日、チャールズの凱旋帰還に伴い、オーブリーにせきたてられて、ホップズはロンドンに戻つた。

オーブリーは「陛下のためたき還御から二、三日経った頃（当時、ホッブズ氏の身を寄せていた貴族《Ⅱ第三代伯爵》の住んでいた）リトル・ソールズベリー館の門前に氏が立っていた時、陛下が偶々ストランド街をお通りになった。陛下は目を留めて優渥にも帽子をとり近況を訊ねられた。……（一週間ほどして）かれは陛下とS・クーパー氏の宅で会談した。陛下はそこで肖像を描かせておられ、ホッブズ氏の愉快な話しぶりに大いに興ぜられた」と記した。チャールズの肖像を描いたのは、細密画で名を馳せるサミュエル・クーパー（一六〇九―七二）で、かれがクレヨンで描いたチャールズ肖像画は「新貨幣鑄造のため」であった。クーパーは同時にチャールズの求めでホッブズの肖像画を描き、それはホワイトホールのクロゼットに吊るされた。しかし、それが、ジェームズ二世のコレクションで、現在、クリーブランド美術館にある未完成のホッブズ素描画であるかどうかは定かではない。

ホッブズは、中風が一層ひどくなりながらも、数学論文やホメロスの翻訳、そして何篇かの種々雑多の著作に加え、重要な二冊の政治著作を生み出した。即ち、『ビヒモス』と『イングラントにおける哲学者と慣習法の学徒との対話』である。（両著については、ここでも、内容の紹介は割愛し、書誌学的問題に限定し紹介することにとどめたい。）『ビヒモス』は恐らく一六六八年かその一、二年前に筆記者乃至秘書に口述筆記させたものである。『対話』は、再び媒介者を使つて一六六二年近くかあるいは一六七五年の遅く、執筆されたのであろう。もし、オーブリーの記述が正しければ、それは一六六四年以後のある時期に着手されたことになる。『ビヒモス』は一六七九年にロンドンで印刷されたものが生まれ始めていたが、正式にはホッブズ没後三年の一六八二年まで公刊されなかった。『対話』は、ホッブズの『The Art of Rhetoric』との合本の形で一六八一年に最初に出版され、別個の形では一九七一年まで出版されなかった。一九七一年以前では、一七五〇年『Moral and Political Works』、一八一五年F・Maseres, ed., Select Tracks Relating to the Civil Wars in England…、並びに E. W. VIに収められた。

ホッブズは、生涯で六回目そして最大のペストの流行を切り抜け、一六七三年四月、八四才に達していた。一六七四年

のオックスフォード大学ハートフォード・カレッジの記録には、「Thomas Hobbes Malmesburiensis olim ex aula Magd. donavit snipsius oper latina 3vol.」の記載があり、このラテン語の三巻本は恐らく一六六八年の「Opera Philosophica Omnia」であろうが、それはオックスフォード大学との和解のためか、あるいは卒業生としての親善儀礼として贈呈したものである。しかし、この贈呈は効き目なく、オックスフォード・クライスト・チャーチの学寮長で「当代最高の熱狂的国教徒」ジョン・フェル（一六二五—一六八六）との口論に巻きこまれた。フェルは、「De Cive」出版以来、ホップズに強力に非を唱え、「リヴァイアサン」を「恐るべきもの」で「公表するは有害」とみなしていた。フェルは、反論の書は書かなかったが、アンソニー・ア・ウッズの「オックスフォード大学の歴史と故実」の財政支援者であり、出版に関して全権を有していた。かれは、コシモ・デイ・メデイチやソルビエールのホップズ賛辞の削除乃至書き換えを要求した。ウッズはオーブリーに知らせ、一六七四年四月二〇日、ホップズはフェルに書簡を送った。フェルは「貴公はもう老人で、片脚を墓場に突っ込んでいるのだから、自分の最後のことに頭を使うべきだ」と告げた。ホップズは国王に「書簡」の印刷許可を求め、それは大学を批難してはならない等の条件付きで認められた。七月頃、「書簡」は印刷にふされ、その後、間もなく若干部数」がオックスフォードの「コーヒー店や書店に送られ、一部が学寮長の手に移った。かれはそれを読んでカンカンに腹を立て、「歴史」の著者「ウッズ」を呼んで叱りつけ、さらにまた、「自分の敵に通謀したな」と詰つた。」（オーブリー「名士小伝」一一二頁）ホップズはそれ以上のやりとりはしなかった。ウッズ（一六三二—一六九五）は、フェル等誰によっても意気消沈させられず、ホップズ等の卒業生の情報を収集し続け、一六九一—九二年に二巻本の「Athenae Oxonienses」を出版した。その頃にはフェルは亡くなっていたが、ウッズはカソリック教徒であること、あるいは少なくともカソリックの共鳴者たることを疑われ、オックスフォード大学当局と不和の状態となった。一六九三年七月には「Athenae Oxonienses」がクラレンドン中傷の廉で非難され、その結果、ウッズは科料に処せられ、主張を撤回するまで大学から追放された上、「Athenae」の第二巻は国家の手で焚書にされた。ウッズ不信の一因は、フェル——ホップ

ズ論争を解説した別個のホッブズ伝記をウッドが「Atheneae」に入れたことにオックスフォード上層部が反対していたことによるとが判明している。しかし、ウッドは、手放しのホッブズ賛美者だと結論づけることはできない。というのは、一六八三年七月二一日、オックスフォード・カレッジの中庭でニダース以上の書物が公然と燃やされた。その中には、フランス・モナルコマキのステファヌス・ユニウス・ブルトウス（本名、ユベール・ランゲ）の「暴君に対する権利の主張」、また、ジョン・ミルトンやジョン・ノックスの著作と共に「市民論」や「リヴァイアサン」が含まれていた。ウッドは焚書を是認したらしく、「ホッブズの『リヴァイアサン』は国の紳士階級を墮落させ、かれらに有害な教説、即ち、無神論を吹き込んだ」と記した。

ホッブズのその後の創作は、一六七三年初版のホメロス「イリアス」の翻訳（一六七四年、一六七八年（二つの版）、一六七六年に再版された）、二つの数学の著作、即ち、一六七四年の「Principia et Problemata」、一六七八年の「Deameron Physiologicum」と続いた。少なくとも死後出版である「Historia Ecclesiastica」（一六八八）は、（一七二二年に付けられた英語版の題名の如く）「モーゼからマルティン・ルターの時代に至る」宗教史に関する、ラテン語韻文の史書であって、恐らく一六七一年に執筆されたのであろう。ホメロスの翻訳について、ドライデンは「『イリアド』の大胆な翻訳の序文におけるホッブズ氏（かれは数学を研究した如くに詩を研究しているが、それは余りに遅すぎた）、ホッブズ氏は、ホメロス賛歌を終えるべきであったところでそれを始める、といえましょう」と記した。八〇歳をこえて執筆活動を続けたことは驚異的であったが、これにはベーコンの「随想集」の「養生法について」に影響されてか、ホッブズの規則正しい生活と健康法が大きく寄与していた。しかし、衰えゆく健康は防ぎようもなかった。ホッブズの書記で遺言執行者であるデボンシャー家の使用人ジェームズ・ウエルドンや、第三代伯爵付き秘書ジェステイニアン・モースの報告が、ホッブズ晩年の模様を伝えてくれる。一六七九年十月の半ば頃、ホッブズは、「有痛排尿」、即ち、膀胱の潰瘍乃至腸瘍によって引き起こされた可能性のある排尿の際の激痛乃至障害の病いに倒れた。その数週間後、通常冬をハードウィックで過ごした第

三代伯爵、家族及び家の者たちは、馬車をつらね、チャットワースからハードウィックまでの一〇マイルを横断した。ホッブズを「居残しておけないだろうから、羽根布団に寝かせ暖かく衣服でくるんで馬車で無事運んだ。小旅行の後もそれ以前と同じ位に良好な様子だった」とウエルドンは述べる。しかしウエルドンによれば「七、八日後」（モースは「一、二日後」という）、「かれの右の脇腹が完全に麻痺に襲われ、同時に、かれは物を言わなくなった。それから七日間生き、ほんの少し食物を摂り、ぐっすり眠り、何度も話そうとしたが駄目であった。」モースは「私がかれを見た時、『麻痺』、即ち、発作が『理性も感覚も』ホッブズから奪ったと考えた。かれは見渡したが、誰だか判らないと私が思ったのはかれが亡くなる凡そ二日前だった。」という。

ハードウィックでのかれの死後二日目の、一六七九年十二月五日日曜日に、かれの遺体は「ウールの経帷子と柩に置かれ、白布で包まれ、その上に黒いハース布がかぶせられ、そして教会までの少しの道のりを人々の肩にかつがれて運ばれた。かれの葬式に加わり、墓まで随行した（デボンシャー家の）人々や隣人からなる一行は、実に気前よくワイン、ケーキやビスケット等でもてなされた。かれは、現デボンシャー伯爵の祖母〔初代伯爵の妻アン・キリー〕の記念碑にびつたり隣接し、教区牧師による国教会の儀式に基づいて、ホールト・ハックナル教区教会に埋葬された。」ホッブズの墓所は、いつかは黒石で蓋をされ、その黒石の上に「かれの名、生地、誕生日と死亡日が簡素に刻まれる」であろうとウエルドンは付け加えた。モースはこの報告を確認しているが、側廊の床部に置かれた黒石上のラテン語の印刻には、以下の補足的な文がある。つまり、ホッブズが多年にわたりデボンシャー「父子」に仕えていたこと、そして「学識が国内外で賞賛されるにふさわしい人物」であったこと、である。（リチャード・ハッチウエル蔵書目録によれば、墓碑用に使われた印刻は「ホッブズ自身によって作文された」という。）（また、ケネットによれば、ホッブズは最後の病いに罹る前に、可能な墓碑銘を提案する為に友人たちを招いたが、かれの気にいった墓碑銘は「これは真の哲学者の墓である」であったという。）

ホッブズが亡くなった一六七九年十二月四日は、誕生日の時と違い特別な事件はなく、イングランドはスウェーデンとの二つの平和条約、フランスと一つの平和条約を締結し比較的平穏な年であったが、しかし、一六七九年の終わりの月々の天候は異常であった。ウツドが信じられるとすれば、オックスフォードの天候は「十一月半ばの一週間は凍るような天気」が、「その後の一週間は突然暑く塩気塩気の多い天気になり、どんよりとした空と霧で、太陽は週末までまる一週間現れなかった。十二月の第二週を除いては、八日間、太陽は現れなかったし、霧がかかり時折り塩気が多かった。風邪や熱、そして奇病がはやり、それで数人が死んだ。その前の天気、即ち十一月半ば頃の天気はすこぶる寒かったから、この為、数人の老人がこの世を去った。」

八 ホッブズ評価をめぐって

一九七九年十月十二日、マームズベリ町長A・H・バードバード尊師は、ホッブズ没後三〇〇年を称える町民や客の小会合の主催者であった。祝宴に続き、オックスフォード大学ベリアル・カレッヂ元学寮長、イギリス革命と一七世紀英国史の随一の権威クリストファー・ヒルが講演した。ヒルの講演の終わりに、町議会に依頼されテオドーラ・ヒールによって制作されたホッブズの胸像が除幕された。祝宴の為に印刷された式次第の裏には、ジョン・シェフィールドと小説家アフラ・ベンによって三世紀前に書かれたホッブズ頌詩が載せられていた。

シェフィールドは

「我々が暗愚のうちにあつて、

幻想や亡霊、そして、あらゆる無意味な

死霊を恐れていた時に、

偉大なホップズが現れ、明哲な理性の光で、

そうした根拠のないものを、

不面目に敗走させた」

と、うたい、

ベンは、

「あの時、かれはついに死んだのか、

根拠の無い噂なのは。

単にふざけて、そんなは何回も不滅になられるのか、

かくも長くこの世に生きた人々をみれば、

今、永遠の生命をもたれたと考えたのに」

と、うたった。

オックスフォード大学は、一九七九年の終わりの月々にホップズの著作を展示すると共に、かれに関する連続講演を後援し、モードリン・ホールを合併していたハートフォード・カレッヂは「ホップズの人物像を熟考し、ホップズが大学に遺した書物を研究する地域哲学団体の会員の為に」小会合を主催した。十二月九日の日曜日には、ホップズが埋葬されたホールト・ハックナル教区教会の夕べの祈りでかれが偲ばれた。その教区の牧師チャールズ・プリンクワース師は「かれは無神論であったという一般的な見方にもかかわらず、かれが信仰心の厚い国教徒であることは変わらなかった非常に有力な証拠があり、我々はそれ相応に記念するであろう」と述べた。

そういうことはいつもそうであったのではない。ホップズの誕生や死の一〇〇周年や二〇〇周年には何もマームズベリで行われなかったし、今日でさえ、町議会室に置かれたホップズの胸像はそこで目にしうる唯一の記念物である。「ホッ

ホップズは、我が国では殆ど忘れ去られていると思える。ロシアやドイツの諸政党が最近マームズベリを訪問した折、ホップズが殆ど知られていないことにあきれかえった」というのは、一九六八年のマームズベリ一市民の言である。

ホップズ社会主義者説は論外であるとしても、M・アシユリー(一九五二年)の「ホップズ理論は戦前ナチス・ドイツに存在し、今日、鉄のカーテンの背後に存在する全能で包括的な国家に帰結する」とする説も常軌を逸している。

一六四九年、そして一七〇三年に、かれの全著作がヴァティカンの「禁書目録」に載せられ、今日でもそのままである。

ホップズ全集の初版、及び一八三八年から四五五年にかけてモールズワースが編集した第二版の英語版を含め、英語版「リヴァイアサン」は、一六五一年の初版から(第三の異本、即ち「オナメント装飾」本の場合、その初版は恐らく一六八〇年に印刷されたであろう)一八八一年に至るまで出版されなかった。(一八八一年版は、J・ソントンによって編纂され、オックスフォード大学出版局から出版された。)アメリカ合衆国では「リヴァイアサン」は一八八五年になって初めて―その場合、同年のロンドン版の重版として出版された。(E・P・ダントンによりニューヨークで出版された同著は、ヘンリー・モーリーの序文を含んでいる。)一九〇〇年までに更に五つの版が出版されていたし、今世紀では「リヴァイアサン」等の著書が、とりわけ、[De Cive] & [Behemoth] の英語版があまたのハードカバー版及びペーパーバック版で容易に利用可能になった。一九一一年以降、「リヴァイアサン」は、知る限りでは中国語訳はまだないが、イタリア語(一九一一年―一二)、スペイン語(一九四〇)、チェコスロヴァキア語(一九四二)、ポーランド語(一九五四)、ロシア語(一九六四―六五)、ドイツ語(一九六六。一七九四年から九五年にかけて、初期の頃の版は、ラテン語から翻訳された)、そして日本語(一九七四)で出版されている。

「リヴァイアサン」は、「英語圏で著された政治哲学の、最高にして恐らくは唯一の傑作」(M・オークショット)、あるいは「政治的叢知の世界最高の宝庫」(R・G・コリングウッド)と称えられる一方で、「怒濤の海から放り出されるのと同じ位、政治的動乱から異様な出生を伴って放り出された空想上の怪物。……祖先も後裔もないイギリス思想上の孤

絶した、即ち、粗雑で、空論的で誤った現象」(H・R・トレヴァーローパー)と非難されているし、ホップズ自身についても、「トマス・ホップズは、成上り者が全然受けるに値いしなかつたし決して失うことのなかつた高位に、ルネサンスの無秩序の運動が押し上げた、かの著にも棒にもかからぬ成上り者の一人」(T・S・エリオット)といわれている。

エリオットは「ホップズは紛れもない無神論者」とするが、無神論者乃至それに近かつた信念の持主とする者には、レオ・シュトラウス、ジョン・ボウル、ベイシル・ウィリー、トレヴァーローパー、A・D・リンゼイ、S・P・ランブレヒトがいる。逆の見解を抱く者には、H・ウォレンダー、オークシヨット、キース・ブラウン、ウイリス・B・グロヴァア、M・M・ゴルドスミス、S・I・ミンツがいる。F・C・フッドはホップズが正統派キリスト教徒だとする。

何らかのレッテルがホップズに付けられるとすれば、かれは個人的には条件付きの理神論者、即ち、宇宙は、創造的な力、乃至「第一原因」によって運動状態におかれると確信した人物であつた、という状況証拠は少なくとも存在する。宗教や条件付き理神論の効用に関するホップズの認識は「徳と宗教の關係に関する断章」に明らかである。その「断章」は、かれの文書の中にあつて、かれの筆跡ではないとしても「恐らくかれに従つてなつたものである。」「断章」の中で、ホップズは、徳のある行為は、「そうした行為や習性のもとになる支配原理」を必要とするから、「徳と宗教は本質的に同一物である」と論じた。動物の行動は徳があるようにみえるかもしれないが、「野獣」は宗教に基づく「行動原理」を知らないから、そのように考えることはできない。宗教と徳は両方とも「深慮」^{「フルーデンス」}に關係する。その理由は、「深慮が、人間を有徳であるだけでなく信心深くあるよう義務づけるということを、誰が疑うことができるだろうか。深慮が世界のみならず神に対しても職務^{オウイス}を果たすよう人を義務づけることを誰が疑うことができるだろうか。……つまり、神が存在しないとすれば、有徳である上でいかなる深慮も存在しないだろうから、である。とすれば、何であれ、個々の人間に対する私的便益からか、統治の目的に対する公的効用からか、いずれかだとしても、この世における徳の実践やその支持に賛成できよう。宗教を捨ててみよ、そうすれば、一切が空の樽にすぎない。」換言すれば、宗教が無ければ、徳や深慮それ自体、そし

て拡げていえば、政治や「統治の目的」は不安定な基盤の上にある、ということである。
かくして、ホッブズの宗教・宗教性やその他の問題であれ、当時も今日も、ホッブズをめぐる論争は途絶えることはい。

(完)